

武蔵村山さいとうクリニック
(東京都武蔵村山市)

院長 齊藤 直人 氏



●1997年、埼玉医科大学医学部卒業後、埼玉医科大学病院第一外科に入局。さいたま赤十字病院、藤倉病院、秩父病院、丸山記念総合病院、吉祥寺南病院 外科医長、消化器科部長を経て、2008年武蔵村山さいとうクリニックを開院。10年医療法人社団もかほ会設立。外科専門医・認定医、乳がん認定医、消化器内視鏡専門医、消化器病専門医他。



「専門がないことが専門」 何でも診る、究極のジェネラリスト

閑静な住宅街にたたずむ「武蔵村山さいとうクリニック」(東京都)は、開業から2年半にして累計患者数1万人以上。1日の平均患者数は約250人で、毎日20人もの新患が訪れる。これほどの実績があるのだから、院長の齊藤直人氏(38歳)はずば抜けたビジネスセンスの持ち主と思いきや、「特別なことはしていないんです。自分でも、これほど早く患者さんが集まると思っていませんでした」と話す。

自身の甲状腺癌と父の肝癌を経て今がある

齊藤氏は、1997年、埼玉医科大学医学部卒業。「一番きつい科に行って徹底的に修業しよう」と、あらゆる臓器を対象とする第一外科に入局した。その後、医局が細分化されそうになると心臓外科を志望。本来なら、そこから華やかな心臓外科医のキャリアを積むはずだった。しかし、卒後4年目、28歳で大きな「事件」に遭遇する。「右の頸部のリンパ節が腫れていたのが教授の診察を受けると、甲状腺癌が見つかりました。心臓カテーテルの際、頸部のプロテクターをしていなかったことによる被曝も原因の一つでしょう」。幸い、早期に甲状腺全摘術を行い、順調に回復した齊藤氏。しかし、その後のキャリアについて考えずいられたなかったという。



▲CT導入にはかなり苦悩したが、患者満足度は高い。



▲子ども達にも大人気の水槽がある待合室。



▲やわらかな曲線がやさしい落ち着いた雰囲気を受付。



▲第一診察室。第二診察室なども駆使し、平均250人の患者を診察している。



▲内視鏡検査も上下あわせて一日4~5回実施している。



▲さまざまな最新医療機器が並ぶ。

「自分の痛体験を糧に、痛患者の気持ち分かる医師になりたい。心臓外科ではなく、痛専門の消化器外科に進むことに決めました」

その後は、肝臓専門医として着実に実績を積んでいった。大学病院ではチーフレジデント、医局人事で赴任した病院では外科部長とキャリアアップしていった。しかし05年、再び「事件」が齊藤氏を襲う。

「ある日、珍しく父が来院したんです。腹部の不調を訴えるので診察すると、肝細胞癌でした。それも肺転移した末期状態。私は、主治医としてあらゆる手をつくしました。肝癌の権威の先生に助言をいただき、精一杯の治療をし

ました。しかし、癌が見つかって40日後、父はこの世を去りました」

自ら最期の脈を取り、死亡診断書を書いた齊藤氏。この時、専門医であることへの疑問が沸いたという。「時代は専門医を求め、私自身もメス一本にかける専門性を追求してしました。しかし、肝臓のスペシャリストといっても、治せない癌がある。人の命を救いたくて医師になったにもかかわらず、専門医である以上は患者の一部しか治すことができない。肝臓だけでなく、内科も外科もなんでも治せる一般医になりたい。それが、もっとも患者さんのために有益だと思いました」

メスをおろすことには最後まで悩むだけ全力疾走できる背景には、経営業務などを任せられるシステムがある。「30人ほどのスタッフの中に、事務長や看護師長をおいてクリニックを組織化しました。最初はトラブルも多く大変でしたが、この半年で私が裏方に携わることなく、120%診療に集中できる体制が整いました」

収入アップや、プライベートの時間の確保といった明確な目的があったわけではない。「患者を治す」という、医師本来の仕事に最大限の力を注ぐこと。それが、武蔵村山さいとうクリニックに患者が集まる理由であった。

文・越前 綾子/撮影・中込 浩一郎

も、縦割りの勤務医生活に終止符を打った齊藤氏。36歳で開業し、ジェネラリストとして新たな道を歩み始める。

眼科も耳鼻科も婦人科も全て診る

クリニックの建物は、亡き父が残した物件を改装した。3階建ての1階は待合室や診察室、処置室、検査室等。2階には内視鏡室やリハビリ室、リカバリ室等があり、両階の合計床面積は約140㎡と広い。医療機器も揃っており、エコーやレントゲンだけでなく、ヘリカルCTも導入した。「ヘリカルCTの導入は予算的には厳しいものがありますが、画像で残る分、診断に関する言い訳が通用しない。そうやって、自分を追い込まなければならぬ」と思ったのです」

標榜科は、内科、外科、小児科、リハビリテーション科を掲げた。開業し

勤務医時代との大きな相違点

- オンとオフの区別がはっきりつけられる
- 全責任を自分が取るというプレッシャーがある
- 自分がやりたかった医療に全力を注ぐことができる
- 学会に参加することが難しくなった

「震災後は不安感から不眠や目眩に悩む患者さんが増え、毎日10人は来院します。こうした時だからこそ、あたたかも日常のように診療を続けることが大事だと思っています。日が暮れる前の